
鈴河荘怪奇譚（すずかわそうかいきたん）

母流俱 玩具

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すすかわそつかいきたん
鈴河荘怪奇譚

【Nコード】

N8100Y

【作者名】

母流俱 玩具

【あらすじ】

昭和58年、夏。築20年のアパート鈴河荘、そこで繰り広げられる怪現象。

住人は翻弄され、不幸な出来事が連鎖する。被害妄想、嫉妬、疑心暗鬼。

はたして彼らは生き残れるのか・・・

十津川圭二の場合 その1（前書き）

ゾクゾクするような話を書きたくて、思わず書いてしまいましたw
ジャンルはホラーですが、血とかはなるべく出さない様にしています。
ます。

「怪談」とか「怖い話」みたいな感じで書いていこうと思います。
真綿で首を絞めるような感じで行きたいと思しますので宜しくお願
いします。

十津川圭二の場合 その1

昭和58年夏、僕、十津川圭二は一人暮らしを始めた。兄がこの春に結婚して、実家に住むようになったので、いい機会だから実家を出た。兄夫婦は、遠慮しなくていいぞ、と言ってくれたが新婚夫婦の家庭を邪魔するほど野暮じゃない。

それに、1人の方がじっくり漫画を描ける。一応漫画家志望なのだが、応募しても佳作どまり。デビューの話はまだまだ先の話だ。

「えつと・・・たしかこの辺なんだけどな・・・」

不動産屋から貰った地図を片手に、アパートを探している。しかし見難い地図だなと、ぶつぶついいながら歩いていると目的の場所に着いた。

「あつた、あつた。鈴河荘、間違いない。」

鈴河荘、築20年の年季の入ったアパートだ。6畳1間、台所とトイレは付いているがお風呂が無い。歩いて10分の所に銭湯があるっていうけど・・・まあ僕の収入では、ここが精一杯だったわけだが。

すると、アパートのから女の子が飛び出してきた。ここの住人の子かな、とりあえず声をかけてみるか。

「あのーちよつといいかな？」

女の子は立ち止まって、僕の方に近づいてくる。小学生くらいかな、目が大きくて結構可愛い。

「ん、なんですか？」

「今日からここに引っ越してきた、十津川って言っただけど・・・お譲ちゃんはこのに住んでる子？」

すると女の子は、ニコリと笑って話し始めた。

「あ、十津川さんですか。お祖父ちゃんから話は伺っています、遅

いから迎えに行こうと思つてたんですよ。」

あどけない顔からは、想像できないほどしっかりした子だ。

「迎えにつて・・・お嬢ちゃん大家さんのお孫さん？」

「はい、吉野桜しきのさくらつて言います。お祖父ちゃんと一緒に、ここの101号室に住んでいます。今日からよろしくお願いしますね、十津川さん。」

丁寧な挨拶をされて、あつけにとられた。本当にしっかりした子だな。

「こちらこそ、よろしく申し上げます。改めて十津川圭二つて言います今日からお世話になりますね、桜ちゃん。」

桜ちゃんは、にこにこしながらお辞儀をしてくれた。僕もそれにならつてお辞儀をする。

「それじゃ、お部屋に案内しますね、こつちですよ。」

桜ちゃんに連れられて、自分の部屋に向かう。階段を上る途中に、1人の女性がこつちに来た。

「有希ゆきおねーちゃん！こんにちは。」

有希おねーちゃんと呼ばれた女性は、立ち止まって桜ちゃんに挨拶をしている。

「あ・・・桜ちゃん・・・こんにちわ・・・」

すこし俯うつむき加減で、桜ちゃんに挨拶をしている。小柄で大きな眼鏡をかけている、地味な女性だが化粧をすれば美人になるだろう。

「有希おねーちゃん、今からおでかけ？」

「うん・・・これからアルバイトなんだ・・・」

アルバイトつて事は学生か？有希と桜ちゃんは会話を続けている。

「本屋さんのアルバイトだね、また面白い本紹介してね。」

「うん・・・桜ちゃんが気に入る本、また、見つけておくね・・・」

「あ、いつけない忘れてた。こちら今日から204号室に引っ越してきた、十津川圭二さん。」

いきなり紹介をされて、泡を食ったが落ち着いて自己紹介をした。

「十津川圭二といいますが、今日からよろしく願います。」

「さ、桜井……有希といひます……202号室に住んでいます……こちらこそよろしくお願ひします……」

顔を真つ赤にしながら、挨拶をしてくれた。男が苦手なのかな……いきなり嫌われたって事は無いとおもうけど……

「じゃあ……桜ちゃん、十津川さん……わたし急ぐから……また……」

「うん、じゃあねーいつてらっしやい！」

有希さんは、ペコリと会釈をして階段を下りていった。

「桜ちゃん、僕嫌われたのかな……」

桜ちゃんは、きよとんとした顔をして不思議そうな顔をして話しかけてきた。

「なんで？そんなことないよ。有希ねーちゃんはいつもあんな感じだよ。」

なるほど、要するにおとなしい子なんだな。なにせよ、若い女の子が居るって事は悪くない。

「はい、ここが十津川さんの部屋ですよ。」

階段のすぐ横が、僕の部屋だ。桜ちゃんから鍵を貰って、部屋に入る。荷物は事前に運んでいるから後は荷解きだけだ、と言っても荷物なんてそんなに無いんだけど。

「じゃあ、桜はここで失礼しますね。お隣の203号の生駒さんと201号の高田さんは夜遅くに帰ってくるから挨拶は明日でいいんじゃないかな。」

「そうか、今日は色々ありがとうね桜ちゃん。大家さんには、後で挨拶しに行くよ。」

「お祖父ちゃんは、今日はいないんだ。また今度でいいよ。」

「そうなんだ……じゃあまた改めて。」

「じゃあ十津川さん、またね。」

桜ちゃんは、微笑んで部屋を出て行く。そしてドアを閉める瞬間、桜ちゃんが妖しく笑った気がした。背筋がゾクリとした、気のせいだろう。

疲れているんだな、荷解きは明日にして今日は銭湯に行つて寝るとするか。

銭湯から帰つてきて、部屋に戻つた。帰る途中に酒屋があつたので、缶ビールを2本買って来た。風呂上りのビールは最高だ、立て続けに2本一気に飲んでしまいついついそのまま寝てしまった。どれくらい時間がたったのだろう、寝ぼけ眼まなこで時計を見ると夜中の2時だつた。

「うーん・・・うつかり寝ちまつたな・・・」

すると、部屋の外からなにやら話し声がする。誰だ、こんな時間に・・・すこし聞き耳をたてて、その会話を聞いてみた。

「今度は、どれくらいもつたるね。」

「そうね・・・結構もつような気がするけど・・・」

「まあ、余計な事さえしなければ大丈夫だと思うけどね。くくく・・・」

「余計な事さえしねけりやね・・・大家さんの様に・・・」
話しているのは、桜ちゃんと有希さんだ。なんだ、もつって。余計な事つてなんだ・・・それに大家さんの様につて・・・
寝ぼけているんだな、たちの悪い夢だ。寝よう、僕は気味が悪くなつて再び眠りについた。

目が覚めた、時計を見るとお昼をまわっている。

「あちゃー寝すぎたな・・・昨日は変な夢をみちまつたな。」
服を着替えて、買い物の準備をする。外食も良いが、自炊をしなればお金が掛かってしょうがない。昨日、銭湯の帰りにスーパーを見つけたのでそこに向かうとしよう。部屋に鍵をかけて階段を下りていくと、丁度学校帰りの桜ちゃんに出会つた。

「桜ちゃん、いま学校からの帰りかい？」

「うん！ただいま。十津川さん、今起きたの？お寝坊さんだね。」

「ははは、まいったな。そうそう、大家さん今日は居るかい？」
桜ちゃんは急に表情が曇った、俯いて話し始める。

「うづん・・・まだ帰ってないんだ。」

「そ、そう。じゃあ、お父さんか、お母さんは居るかい？」

「いない・・・おとうちゃんも、おかあちゃんも居ないんだ・・・
桜、お祖父ちゃんと2人暮らしたから。」

桜ちゃんは、ますます影を落としていく。しまった、余計な事を聞
いちゃったかな。

「ご、ごめんよ・・・知らなかったから・・・じゃあ昨日から桜ち
やん1人なの？」

「うづん。有希おねーちゃんの所に、お世話になってるんだ。」
有希さん・・・その言葉を聞いて、昨日の夜中の事を思い出した。

僕は、恐る恐る昨日の事を聞いてみることにした。

「あ、あのさ・・・桜ちゃん夜中の2時頃に、有希さんと僕の部屋
の前で話ししていなかった？」

「え？夜中の2時頃に？してないよ。桜も有希おねーちゃんも、学
校だから夜更かししないよ。寝ぼけてたんじゃないの？」

きよとんとした顔で、僕を見つめている。どう見ても嘘はついてい
ないようだ。

「そ、そうだよ。ごめんね変なこと聞いて。桜ちゃん、困った事
があったらいつでも言ってるね。」

「そうだね、そのうちお邪魔するよ。」

その時、一瞬だが彼女が不敵な顔をして笑った気がした。一気に血
の気が引いた感じがした、喉をゴクリと鳴らす言葉が出ない。

「じゃあ、桜。これから宿題しなくちゃいけないから、またね。」

「あ、ああ・・・またね・・・」

桜ちゃんが、ゆさゆさとランドセルを揺らしながら僕の横を駆け抜
けていった。僕も気を取り直して、買い物に向かう。その時だった。

「十津川さん・・・」

急に、後ろから声を掛けられた。桜ちゃんだ、いや、彼女の声とは

違う。この声は大人の女の声だ、僕は声の方に振向いた。

「世の中にはね、知らなくて良いことがあるんだよ・・・知ってしまつたら不幸な事が起こるかもしれないよ。そうなつたら桜、知らないからね・・・」

声の主は桜ちゃんだった、可愛らしい少女の雰囲気は無く冷血な眼で僕を見ている。なんなんだこの子は・・・

「知らなくて良いことって・・・」

僕の言葉を無視する様に、彼女は振り返つてそのまま部屋に入つていった。

「なんだつてんだ・・・一体・・・」

その日は買い物をする気にはなれず、そのまま部屋に戻つた。

夜になつた、昼間の桜ちゃん言葉が耳について離れない。やっぱり、昨日の夜に桜ちゃんと有希さんは部屋の前で話をしていたんだ。

余計な事つてなんなんだ、知らなくて良い事つてなんなんだ。訳がわからない・・・

すると隣の部屋のドアが開く音がした、そういえばまだ隣に挨拶に行つてないな。帰つてきて行き成り行くのは失礼だから、すこし間を置いてから行くことにするか。

1時間経つてもうそろそろ良いだろう、予め買って置いた手土産を持つて隣に向かう。呼び鈴を押すと、若い女性の声が出た。

「はい、どなたですか？」

「あのう、昨日204号室に引越してきた十津川と言うものです。夜分遅くすいません、ちょっとご挨拶にきました。」

ドアがガチャリと開いた、出てきたのは派手な化粧をした人だった。彼女は、ふーんと言ってじろじろ僕を見ている。そして脇に抱えた手土産を見ると、ニコツと笑い出し愛想よく話し出した。

「わざわざありがとうね、私仕事が遅くつてさー大体今頃の時間になるのよね。えっと・・・十津川さんだっけ？私、生駒純いこまじゅん。純つて

呼んでね。十津川さんっていくつ？」

「ぼ、僕は21です。」

「へー私、22なんだ。年が近いから仲良くなれそうね。よろしくね、十津川くん。」

人懐っこい人だな、でも明るい人が隣でよかった。

「こちらこそよろしくお願いします、純さん。」

2人で、はははと笑いあった。純さんの明るさで、昼間の事が忘れられそうだ。

「もう、他の人たちには挨拶したの？」

「いえ、まだ201号室の高田さんには行ってないんです。」

「高田さんも夜遅く帰ってくるからなー、じゃあ大家さんや、桜ちゃん、有希ちゃんには会った？」

「まだ、大家さんには挨拶出来てないんです。なんか出かけているらしくって、桜ちゃんと有希さんにはもう会いましたよ。」

すると、純さんの表情が曇った。そしてさっきまでの明るい雰囲気は無くなり、真剣な顔をして話し出した。

「大家さん・・・出かけているって？誰が言ったの。」

「誰って・・・桜ちゃんが言っていましたけど・・・」

純さんは考え込んでいる、すると意を決したように小声で話し出す。

「十津川くん、桜ちゃんと有希ちゃんには気を付けた方がいいよ。」

あの2人、かなりヤバイ気が・・・」

話の途中で、純さんの顔が青ざめた。どうしたんだろうと思いつつ後ろを振る向くと、そこには桜ちゃんと有希さんが立っていた。

「こんばんわ、十津川さん、純さん。」

「こんばんわ・・・」

どうして、2人が近づいてきた気配なんか無かった。2人の姿を見た純さんは、小さく震えている。

「純さん、お仕事終わったの？」

「う、うん・・・さ、さっき帰ったばかりなんだ・・・」

「遅くまでごくりつさまです・・・」

純さんは、冷や汗をかいて青ざめている。必死に恐ろしさに耐えているようだ。

「お疲れの様ですね・・・顔色が悪いですよ・・・余計なお喋りは止めて、早くお休みになられた方がいいんじゃないですか・・・」

「そ、そうね。あ、ありがとう有希ちゃん・・・じゃ、じゃあまた今度ね十津川くん。お、おやすみなさい。」

勢いよくドアが、バタンと閉められガチャリと鍵が掛けられた。蒸し暑い夜だというのに、寒気がする。

「有希おねーちゃん、純さんどうしたんだろうね。」

「きつと、疲れているのよ・・・でも明日は土曜日だから、きつとお寝坊するかもね・・・ふふふふ・・・」

「そうだね、純さん明日はお寝坊だね。ふふふふ」

2人の笑い声が、夜の闇に響き渡る。僕は、恐ろしくなつて部屋に戻つていった。

部屋に戻つても、震えが止まらない。なにかある、このアパートにはなにかある。あの2人はなんなんだ・・・純さんが言っていた、あの2人はヤバイ気がするって。もしかして大家さんは・・・嫌だ、想像したくない。忘れよう、忘れたほうが良いんだ。

そう自分に言い聞かせて、家から持ってきたウイスキーを飲んだ。酔ってしまえばいい、酔ってしまえば悪い夢だと思える。

そしてウイスキーの小瓶を1本空けて、そのまま眠りについた。

ドンドンと、激しくドアを叩く音がする。その音で眼が覚めた、頭がズキズキする・・・二日酔いだ。

「なんだよ・・・一体。」

玄関に向かって歩き出す、気分が悪い・・・

「はい・・・どなたですか。」

ドアを開けると2人の男が立っていた、誰だ？見に覚えのない人たちだけ。

「すみません、突然おじやまして。私たち警察の者ですが、お隣の生駒純さんについてお聞きしたいことがあります。」

「純さん・・・？純さんがどうかしたんですか？」

「はあ、実はですね。今朝お隣の生駒純さんが、自室で自殺をされてお亡くなりになりました。」

十津川圭二の場合 その2

僕は耳を疑った、そんなまさか・・・警察官は続けてはなします。

「亡くなられた時間は、昨夜10時頃らしいんですよ。あなた・・・えーと・・・」

「十津川です、十津川圭二です。」

「十津川さん。あなた昨日、生駒さんとお会いになってますよね？その時、なにか変わった事ありませんでしたか？」

さっきまで、鈍っていた頭が一気に正気にもどった。だが、まだこの警察官の言っている事に現実味を感じない。

「はい、昨日引越しの挨拶に伺いました。僕、一昨日越してきたばかりなので生駒純さんとはその時が初対面です。」

「そうですね・・・いや、あなたを疑っている訳じゃ無いです。

一応、なにか手掛かりがあるかと思ひまして。わたくし、鳴狗署の宇陀重吉といひます。なにか思ひ出されましたら、鳴狗署刑事課の宇陀までご連絡ください。」

それではといい、宇陀刑事はドアを閉め去っていった。純さんが自殺？そんな馬鹿な・・・昨日初めて会ったが、とてもそんな風には見えなかった。どっちかと言えば、自殺から程遠い感じすら見受けられたのに。

そういえば、昨日の夜の事を思い出した。純さんと話をしている時に、桜ちゃんと有希さんが来て、2人を見た純さんは酷く怯えていたな。

2人は何か言っていたような気がする、なんだっけ・・・そうだ、純さんはお寝坊するって言っていた！まさか、あの2人が・・・そんな事ありえない、でも純さんはあの2人はヤバイって言っていた。彼女は何かを知ってしまったんだ、僕が知らないなにかを。

すると、突然誰かがドアをノックした。ビクツとして、ドアの方を振向く。

「十津川さーん、桜だよ。起きてる？十津川さーん。」
桜ちゃんだ、何をしにきたんだ。僕は躊躇ちまひったが、玄関に向かつていった。僕はまだ何も知らないし、なにも話してないから。

ドアを開けると、桜ちゃんと有希さんが立っていた。桜ちゃんは手鍋を持っている、彼女はニツコリと笑って話し出す。

「十津川さん、起きてたんだよかった。お昼ごはん食べてないでしょ？おすそわけ持ってきたんだ、桜たち2人じゃ食べきれなくてさ。」

彼女の笑顔が、今は少し不気味に感じる。

「あ、ありがとう・・・助かるよ。よかったら中に入ってよ。」

2人は、お邪魔しますと言って中に入ってきた。もしかしたら、彼女達は純さんの自殺について何かを知っているかもしれない。その何かを知りたいために、彼女達を中に入れた。

「へー結構片付いてるんだね。男の人の部屋って、もっと散らかってると思ったよ。」

「私・・・男の人の部屋入るの初めてだから・・・そうなの？桜ちゃん・・・」

「片付いているって言っても、何も無いだけだよ。その辺に座ってて、今コーヒーでもいれるよ。」

僕は平静を装って、台所にむかった。3人分のコーヒーを入れて彼女達の元へ向かう。暫く他愛の無い話をして、意を決して純さんの自殺の話をきりだした。

「純さん、なんで自殺なんかしたんだろうね・・・」

ぼつりと小声で話し出すと、2人の表情が厳しくなった。やっぱり、この2人はなにか知っているんだ。そして桜ちゃんが、低い声で語りだす。

「生駒純いしごまじゅんは、知ってはいけない事を知ってしまったんだよ・・・それに耐え切れなくて自ら命を絶ったんだ・・・」

大人びた口調で、桜ちゃんが話す。それに続いて有希さんが、コーヒ―を1口飲んで話した。

「そうね・・・可哀想な人だわ・・・でも、それを自分だけで留めておけば良いものを・・・他人に話そうとしてしまうから・・・ねえ、十津川さん・・・」

2人の、冷酷な眼が僕を見つめる。寒気がする・・・間違いない、この2人が純さんを自殺に見せかけて殺したんだ。僕はいまさらながら後悔してしまった、2人を部屋の中に入れた事を。

「ぼ、僕は・・・何も知らない、何も聞いていない・・・」

「ふうん・・・そうなんですか？だったら良いんですけど・・・」
有希さんが妖しく微笑む、恐ろしい・・・背筋に冷たい汗が流れる。すると桜ちゃんが、僕にグツと近づき上目遣いで話し出す。

「十津川圭二・・・あなたは本当に何も知らない？もう知っているんじゃないの？だったら・・・あなたは、生駒純と同じ結末を迎えるかもしれない・・・」

恐ろしさで頭が一杯になった、僕はそれを振り払うために大声をだして否定する。

「うああああああああああ！知らない！！知るもんか！！出て行け！出て行ってくれ！！」

急に大声を出されて、2人は驚いている。

「え、ど、どうしたの？十津川さん。桜たち何か気に障る事でも言っただけ？」

「ごめんなさい・・・私、何か十津川さんの気に入らない事しちゃったのかな・・・だったらごめんなさい・・・」

何を言ってるんだ、白々しい。今更そんな顔をしたって無駄なんだ。「うるさい、うるさい、うるさいうるさい！！いいから出て行けっっているんだ。出て行かないとぶっ飛ばすぞ！」

吉野桜と桜井有希は、眼に涙を浮かべて謝罪している。だが、そんなものはもう僕には届かない。

「ごめんなさい、ごめんなさい。ぐすっぐすっ。」

「わかりました・・・出て行きますから・・・暴力は止めて下さい・・・桜ちゃん・・・いきましよう・・・」
2人を押し出す様に、部屋から追い出した。殺されるもんか、僕は絶対殺されるもんか！
そうだ警察、警察に助けてもらおう。鳴狗署の宇陀だったか・・・あの人に連絡を取ればなんとかしてくれるかも知れない。

電話の受話器をとって、鳴狗署の番号をまわす。何回か通話音が流れた後、電話がつながった。

「はい、こちら鳴狗署です。」

「あの、わたくし十津川と申しますが・・・刑事課の宇陀さんお願いします。」

「刑事課の宇陀ですね、少々おまちください。」

保留音が流れて、暫く待った。そして保留音が切れて、受付の女性の声がした。

「申し訳ございません、ただいま宇陀は不在です。また改めて、お電話お願いできますでしょうか。」

「そ、そうですか・・・わかりました。」

受話器を置いて、電話を切った。肝心な時に居ないのかよ、警察は市民の見方じゃないのか！警察は当てにならない、まごまごしていると

僕は殺されてしまうかもしれない。もしかしたら、今夜にでも・・・落ち着かない、イライラする。そうだ、こんな時は酒を飲もう。台所からウイスキーの小瓶を持ってきて、そのまま一気に流し込む。空きつ腹の胃に酒を流こんで、自分を落ち着かせる。大丈夫だ・・・落ち着け・・・そしてウトウトと睡魔がやってきて、そのまま眠りに落ちてしまった。

眼が覚めると、もう夕方だった。頭が痛い・・・吐き気がする、水でも飲もう。そう思って台所に向かった時、ドアをノックする音

がした。誰だ一体・・・ドアのスコープを覗くと、そこには吉野桜と桜井有希が立っていた。

「あ、あのう・・・十津川さん・・・さっきの事謝ろうと思って・・・よかつたら空けてくれるかな？」

吉野桜が、俯いて話している。何をいまさら・・・そうか、とうとう僕を殺しに来たんだな。よし、むざむざ殺されるものか、やられる前にやってやる。台所に戻って包丁を取り出した、それを背中に隠し悟られないようにした。

「う、うん・・・こっちこそ急に怒鳴ったりしてごめんよ、今開けるから。」

ドアを開ける、2人は申し訳なさそうに立っていた。すると桜井有希は、ビニール袋を差し出しおどおどしながら話し出した。

「あ、あの・・・これ・・・仲直りしようと思ひまして・・・ジュース買ってきたんですけど・・・よかつたら・・・」

「あ、ありがとう頂くよ・・・」
すると、吉野桜はビニール袋からジュースを取り出し栓を空けて差し出してきた。

「これおいしいんだよ！新発売のシソ入り抹茶スカッシュ。十津川さんも飲んでみて。」

シソ入り抹茶スカッシュ？なんだそれ・・・聞くだけだ不味まずそうだ。
「う、うん・・・後で頂くよ・・・」

そう言つて断つたのだが、彼女は缶ジュースを僕の胸元に押し付けてきた。

「今飲んでよ・・・さあ・・・」

また、あの凍る様な眼だ。彼女はグイグイと押し付けてくる、僕は後ずさつて部屋の中に戻された。彼女達も、中に入ってくる。

「さあ、飲んでよ・・・さあ、さあ、さあ、さあさあさあさあ
！！！！」

これは、毒薬かなんかか。これで僕を毒殺する気なんだ・・・
やられてたまるか、やられてたまるか、やられてタマるか、ヤラレ

てタマルか、ヤラレテタマルカ・・・

ボクハ、ホウチヨウヲフリカザシ。フタリニオソイカカタ・・・
夕暮れの鈴河荘に、悲鳴が響きわたった・・・

鳴狗署刑事課、宇陀刑事は先日行われた『鈴河荘惨殺事件』の調査をしている所だった。そこへ、宇陀の部下である黒滝くろたきがやってきた。

「宇田さん、加害者の十津川圭二の詳細がわかりました。」

「おう、クロさんご苦労様。で、十津川圭二は何者だったんだい？」
黒滝はパラパラと手帳をめくり、書かれたメモを読み出した。

「十津川圭二、21歳。無職、アルバイトや漫画家のアシスタント等をして収入を得ていたようです。彼は7月20に実家を出て、21日に鈴河荘に越してきています。実家を出た理由としては、彼は精神的にかなり病んでいたらしく。両親や、兄夫婦に暴力を繰り返していたそうです。」

「精神的に病んでいたのか・・・その原因つてのはなんだい？」

宇陀はタバコに火を付け、深く吸い込み静かに煙を吐いた。黒滝は話を続ける。

「アシスタント仲間に聞いたところ、彼は漫画の投稿を続けるもなかなかデビューができない事で悩んでいたそうです。そんな事があって気が短く、被害妄想になっていたそうですね。それに酒乱の気があつたらしく、酒を飲んで仲間に大怪我をさせた事があるそうです。」

「そうか・・・被害妄想で酒乱か・・・救い様がないな・・・だが、その十津川圭二も死んじまつてるからな。」

そうですね、と黒滝が言うと、宇陀はタバコを乱暴にもみ消した。

「じゃあ、クロさんは引き続き『鈴河荘惨殺事件』の方を調べてくれ。ワシは、生駒純の方を調べてみるから。」

「え、生駒純の件は自殺じゃないんですか？」

「そう思っただけだな。生駒純は、201号室の高田大和不倫関係にあったそうだ。それに事件直後、高田は行方をくらませている。何か知っていると思うんだがな、ワシの刑事の勤ってやつだ。」
2人は刑事課の部屋を出て、それぞれの調査に向かっていた。宇陀は鳴狗署を出て晴れわたった空を見上げ、呟く様にいった。

「まったく・・・平和な町が血生臭くなっちまったもんだ・・・」

『鈴河荘惨殺事件』

加害者 十津川 圭二 21歳

被害者 桜井 有希 19歳 吉野 桜 10歳

事件内容 加害者十津川圭二は自室で、桜井有希、吉野桜を惨殺した。そして加害者自ら喉に刃物を突きつけ自殺している。

被害者は2人とも数十箇所による刺し傷、桜井有希は心臓まで達する傷により出血死。吉野桜は頸動脈切断による死亡、ほとんど首が千切れ掛けてた状態だった・・・

十津川圭二の場合 その2（後書き）

楽しんでいただけましたでしょうか？

十津川圭二が段々壊れて行く様に書いたつもりですが上手くいったかどうか・・・

残酷な描写は苦手なので書かないようにしていきますw

でも、演出上書いてしまうかも・・・

次は誰を主人公にしようかな？

それでは次回もみなさんに楽しんでいただける様に書いていきますので

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8100y/>

鈴河荘怪奇譚（すずかわそうかいきたん）

2011年11月24日20時51分発行